

夏まき寒玉キャベツの4月収穫作型

寒玉系キャベツの端境期となる4月出荷を目指し、晩抽性品種「冬のぼり」「冬くぐり」を8月20日頃に播種、9月20日頃に定植することで、結球後の裂球の発生が少なく、在圃性が高い特長を活かし、4月下旬まで収穫期間の延長が可能である。

内容

加工・業務用を中心に需要の多い寒玉系キャベツ生産において、4月は夏まき冬どりと秋まき初夏どり栽培との端境期となる。そこで、4月収穫に対応できる夏まき寒玉キャベツの淡路地域における適品種、作型を検討した。

品種は、晩抽性の6品種を供試した。作型は、8月下旬播種－9月下旬定植（作型Ⅰ）と、約1週間遅い9月上旬播種－10月上旬定植（作型Ⅱ）について、2011年から3か年、収量、品質について調査した。

その結果、「冬のぼり」「冬くぐり」「夢ごろも」および「冬勝利」は、裂球が少なく在圃性が高かったものの、播種、定植の遅い作型Ⅱでは、年内生育が不足したまま花芽分化し、結球葉数の減少により球肥大が劣った（表）。これら品種は、肥大に十分な結球葉数を確保するため、適期の播

種、定植が必要であるが、在圃性を活かして収穫期間を延長することが可能であった。中でも「冬のぼり」「冬くぐり」（写真）は、抽苔に伴う花蕾の生育（非可食部となる芯重、芯長の増加）により、内部品質はやや低下するものの、4月下旬収穫でも裂球の発生は少なく、4月収穫に適した品種であった。なお、県南地域であれば8月20日頃の播種で同様の作型が適用できる。

一方、「彩音」「冬武者」は肥大性に優れ、これら品種は作型Ⅱでも結球肥大が安定していた。しかし、4月収穫では気温上昇に伴う急速な結球肥大により、裂球が多く発生し、作型Ⅱにより播種時期を遅くし、生育を後送りしても収穫期の延長は困難であった（表）。

今後の方針

国、他府県の研究機関、種苗メーカーと連携し、より晩抽性、在圃性に優れた4月収穫用の新品种の育成、選抜を進める。

西野 勝（農産園芸部、前淡路 農業部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2423）

表 キャベツの品種、作型が結球重、品質に及ぼす影響（2014年4月8日収穫）

品種	作型	結球重 (g)	結球葉数 (枚)	頂花蕾径 (mm)	芯重 (g)	芯長 (cm)	裂球率 (%)
冬のぼり	作型Ⅰ	2,463	56	19.5	75	10.9	0
	作型Ⅱ	1,676	48	27.5	67	9.8	0
冬くぐり	作型Ⅰ	2,735	66	9.4	62	9.5	0
	作型Ⅱ	1,725	59	26.4	60	9.2	0
夢ごろも	作型Ⅰ	2,869	71	8.0	74	9.0	5
	作型Ⅱ	1,719	65	19.1	62	8.4	0
冬勝利	作型Ⅰ	2,377	65	11.1	61	9.7	5
	作型Ⅱ	2,200	60	20.8	66	9.2	10
彩音	作型Ⅰ	3,040	64	8.5	77	9.1	40
	作型Ⅱ	2,252	61	10.3	59	7.5	25
冬武者	作型Ⅰ	2,799	66	8.3	67	8.7	30
	作型Ⅱ	2,415	62	18.5	61	8.8	25

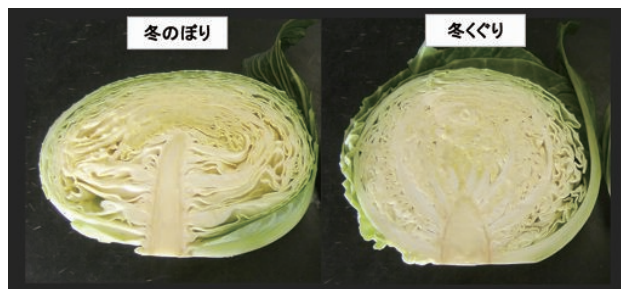


写真 4月収穫に適したキャベツ品種「冬のぼり」と「冬くぐり」（4月22日収穫）